「比べる」ことでせまる音楽の魅力
～思いや意図をもって表現できる子どもに～（２年次）

１．研究テーマ設定の理由

（１）学校提案とかかわって

昨年度の重点目標《課題に向かう対話を深める》にあたって，音楽科では「比べる」をキーワードに「小グループにおける協同的な学び」の実践・実証を重ねてきたところである。質の高い「ジャンプある学び」成立の要件として，目標設定をはじめ教材選択や課題設定の良否が挙げられた。

音楽科でとらえる「対話」については，『音楽とは対話である』（アーノンクール 2006）が示すように，①音楽作品そのものが「対話」によって構成されているばかりでなく，表現に際しても様々な「対話」が要求されているのではないか。②（このことから）「対話」という視点を音楽の授業活動の中に取り入れることで，音楽がもつ本質的なもの（部分）に触れることができるのではないか。③（さらに）「比べる」をキーワードとすることで，音楽作品に内在する様々な「対話」，音楽活動における人間（演奏する子どもたち）同士の「対話」が顕在化するのではないか。―と考えた。

今年度の重点目標《「吟味を生み出す対話」をつくる》については，①子どもの育ちが見える題材構成・評価計画を心がける。②学年に応じて子どもが使える音楽的言語・用語の層を厚くする。③「比べる」活動を用意することでテキスト（対象）との多様な対話をつくる。④「言葉の吟味，考えの吟味」（秋田 2009）が，言語活動として価値観形成へと至る過程で，表現領域の活動にも繋げられるようにする。

（２）音楽科でめざす子どもの姿

「音楽が好きだ・歌いたい・演奏したい・作りたい・いろんな音楽を味わって聴きたい」さらに「仲間と一緒に歌ったり演奏したりしたい・仲間が好きな音楽にも興味がある・仲間の音楽表現にも興味がある・気持ちを込めて音楽を表現したい」子どもをめざす。

そのためには，音楽的「知識・理解（knowledge & comprehension）」「技能（skill）」「能力（ability,capacity）」の３つがバランスよく身に付いていることが必要になるであろう*。そこで音楽科がめざす子どもの姿を次のようにした。　（*ここで言う「能力」とは，「思考力・判断力・表現力」の総称である。）

音楽的「知識・理解（knowledge & comprehension）」「技能（skill）」「能力（ability,capacity）」の３つが，音楽的関心・意欲・態度に支えられてバランスよく身に付いている子ども

上の３つを身に付けることで，自分に合った生活スタイルを見つけ，自分を音楽で豊かにし，生涯音楽の基盤を手に入れようとする子どもになっていくと考える。同時に工夫して音楽を表現したり，仲間とのかかわりからも自分の音楽的世界を広げていったりする子どもが育つと考えている。

本校の子どもたちに目を移すと，よく歌いよく表現する。これには「リクエスト・タイム」（全学年で個人持ちの歌集・３訂版『歌はともだち』から子どもたちのリクエストで歌う活動）が大きな効果を生んでいるからだ。歌のレパートリーが非常に多く，音程を正しく取ることができたり，聴いてすぐに歌えたりする子どもがほとんどである。

しかしながら，楽曲を成り立たせている諸要素を比べて聴いたり，思いや意図をもって音楽的に表現したり，音符や記号から音を思い浮かべて表現したりする活動では，年々進んではいるがまだまだ課題が多い。一昨年度までの２年間はテーマ《楽しく学ぶ音楽の基礎・基本》を掲げ，「器楽」「音楽づくり」の基礎となる音符や記号，記譜を低学年から連続して扱う（書く）ことで定着を試みた。さらに「作る」活動から視奏力を高め，高学年での旋律づくりやふしの重なりの学習へとつなげる事例研究を行った。昨年度は，これらを一歩進めて「思いや意図をもって表現する」方略を，「音楽的・対話・比べる」をキーワードに主に５年生の事例研究で明らかにした。今年度，低学年では，音楽だからこそできる「見

る・聴く・愛する」力の育成を，高学年では，根拠をもって自分なりの音楽的な意見が言える子どもの育成をめざしたいと考えている。

２．音楽科学習における「学びの質の高まり」

音楽科学習における「学びの質の高まり」とは，①学習したことが使えるようになること，②学び続ける目標がもてること，すなわち音楽の学習を通して基礎的・基本的な知識，技能を確実に身に付け，活用する力を育むとともに，目標感をもってさまざまな音楽とかかわりをもつことだと捉えている。

ここで新学習指導要領（平成20年３月告示）に記載された〔共通事項〕（抄）に着目したい。

・音楽を形づくっている要素を聴き取り，面白さ，美しさを感じ取ること

・身近な音符，休符，記号や音楽にかかわる用語について音楽活動を通して理解すること

〔共通事項〕は思いや意図をもって音楽を表現したり鑑賞したりするための基になると捉えることができよう。これらは，すぐに身に付くものではなく，定着するためには繰り返し指導を行う必要がある。加えて具体的に「書く」および「ことば」または「からだ」で表す活動も必要となろう。

３．研究の展望

音楽科では，子どもたちが質の高い音楽的な力を身に付けるために，「比べる」をキーワードに表現及び鑑賞の楽しい活動を通して，音楽の魅力にせまりたい。思いや意図をもって表現できる子どもを育てるために，以下の方法で楽しみながら学びの質が高まることをめざす。

② 表現と鑑賞の活動において，「比べる」学習の筋道を明らかにする。

②集中して聴く（見る）活動から，感じ取ったことを言葉などで表せられるようにする。

③「比べる」活動を「対話」とリンクさせることによって，楽しみながら学びの質が高まることをめざす。

課題Ａ《４つの活動領域》「歌唱」「器楽」「音楽づくり」「鑑賞」
課題Ｂ《育てたい力》音楽的「知識・理解」「技能」（習得事項：〔共通事項〕を含む）／「（活用する）能力＝思考力・判断力・表現力」　＊「関心・意欲・態度」はこの３つを支えて不可分
課題Ｃ《質を高める指導法等の開発》　～どのように比べるか～

◆本研究で明らかにすること

課題Ａ「どの教材で」⇒課題Ｂ「どの力を」⇒課題Ｃ「どのように比べれば」育つか

さらに，すべての子どもたちが学習内容を身に付けていくために，グループ（低学年ではペア）での活動を取り入れる。それぞれの子どもたちの多様な「感じ」を共有し，「気づき」を課題に協同的な学びを作っていく。

４．研究の評価

①「比べる」活動を行うことで子どもたちの学びが変化したか。その変化を表現にいかすことができたか。

②「比べる」活動を行うことで子どもたちが思いや意図をもって表現することにつながったか。

③事実を見つけ，その事実を根拠として「吟味」する音楽的な言語力の高まりから，すべての子どもたちの学びの深まりが見られたか。とりわけ「努力を要する」と判断した子どもたちが改善されたか。

④課題設定の工夫（教材設定の工夫，発問の工夫，課題プリントの使用や一覧表示）によって，すべての子どもたちの学びが変化したか。とりわけ「努力を要する」と判断した子どもの学びが改善されたか。また学級の子どもたちの学びが，客観的に変化の様相を見せたといえるか。

(注)『音楽とは対話である』：著名な指揮者であり音楽学者でもあるニコラウス・アーノンクール（1929～／オーストリア）近著のタイトル。